

翻
刻

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

高
草
郡

- 一、私に句点、濁点を加える。原本のどこどこに濁点加えられているがそれらの区別はしない。
- 一、漢字・仮名とも、原則として現在通行の字体に統一する。
- 一、文字の大小の比率、配置は原本と異なる。
- 一、改行は原本のままとする。
- 一、絵とその題を四角の枠内に掲げる。配列は原本に従う。絵に書き加えられている説明のうちの主なものも枠内に記す。

高草郡

【下巻】

【下二表】

高草郡 安長嵐ヶ鼻 今雁津と云。 徳吉昔ハ鶴田ト云耶。

あし引の嵐がはなは名のみにてふり敷ものは雪計なり

同 岩室神社 大巖田圃の中に在。南の下に小祠を建て

祭る。是吉山邑の氏神なり。嘉永の頃 民屋を置岩室村と

いふ。此岩に登れば一郡の風景最よし。

さざれ石のむかしよりなをうごきなき

国をまもと岩室の神

同 加路浦 吉備大臣廟

社頭松樹塩風に馴て曲折て最面白し。此地砂山にして袋

千代の両川の港口にて常に船舶岸をあらそふ。尤繁昌の地。

社頭の遠望海上の白帆雲井のよそにして隠岐の二嶋は

天際に霞み或ハ磯に網引きする浦人のかれ声口ばかり動き嶋

根にかづきする海士ハ浪に入て黒く東の沙漠は風ふいて白し。

八町沖に鳥が嶋。 此嶋頂に戎祠あり。東の巉岩を立^テ鳥帽

子と名づく。峻しき岩なり。

ぬかづけるきねに問ばや汐風に

幾世なれてはからかろの宮

浦人の網引するを視て

今日も又鰯をとりが嶋かけて

霞の網をはるの夕なき

隠岐嶋 元弘の帝密に忍びし養積舟ニテ伯州御来屋ニ還幸し玉ふ跡。

行幸せしをきの島ねもほしか積

船も霞の立かくしけり

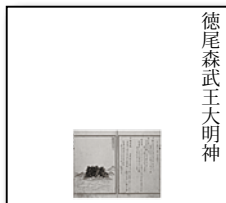
同 徳尾森 近県比なき森なり。老たる松柏の木々いくそばく

の星霜を経たるやらむ。落葉積て蔭々たる中に郭公を聞。

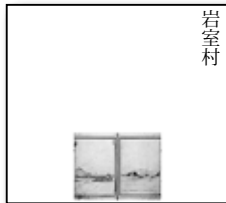
瓜島も程近ければ杳手鳥

ちをはくとてもぬぐことなせそ

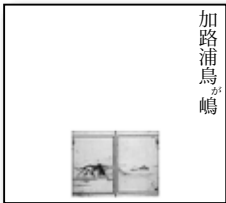
徳尾森武王大明神



岩室村



加路浦鳥が嶋



加路川
東漸寺



同 湖山邑

霞ノ郷カスミノキョウ

和泉式部胞衣塚銘曰

日月逝矣 千載誰友 春霞一円 德音不朽 安倍恭庵建之

同 産湯井戸より嘉永の頃金簪を鑿出スト云。

同 春来ては花の都を見ても尚霞の里の名残をぞ思ふ

里の名の霞を出し鶯の

初音は花の都にぞ聞

是地湖水の風景最勝の境。新古の川水左右に流れ向ハ野崎ザキの小松数万叢生砂漠ニはらばひて左ハ布施の天神山山王の社村落飯ムラの嶋荒田高住不動ヶ崎。青嶋の松ハそれかあらむかとばかり。湖水彼方ハ矢山の峯。三津狭間の団子嶋粒嶋ハなか／＼咽を通しがたく龍ヶ崎ハ名よりも深く鵜嶋ハ水際に白く野嶋猫嶋ハねよげに見ゆ。漁舟ハ波に浮沈て危く田夫は畦に煙草のむでやし。鴻雁アシマは芦間に浮て遊び魚鼈ハ浪に沈て染む。実に湖水の眺望は秀逸無双といひつべし。

湖上八勝

野崎落雁 群松のその琴柱コトナかと見る計野ざきに連て落る雁ツレかね

矢山暮雪 武士の矢山の雪の夕暮れは

弓とたはめる礮イロの枯あし

三津帰帆 沖つ風いたく吹らん山蜂の

三津の浦はに帰る釣ふね

福井晚鐘 山風のふくるの寺の入相に

礮うつ浪の花や散らむ

松原夜雨 夜の雨は芦の音づればかりにて

人まつ原の里ぞしづけき

高住夕照 高すみや夕日に浪は染ながら

そまらで青き嶋がねの松

布施晴嵐 雲をなすあぢむらまでも逃て鳧

けふつはものをふせの嵐に

湖山秋月 小山田の濁にしまぬかげ見えて

湖遠くすみわたる月

この小山邑コノコノに鰻ウナギの蒲焼名物。其外糠蝦小雑魚サコ白魚あまさぎ池魚数多産す。

薯蕷ヤマイモのむかしはいざや穴うなぎ

とろゝとすればすべりぬるく

同大寺屋 伯州街道なり。茶屋あり。

大寺屋迄行馬士のうなづけば

馬ウマをがみをたれてこそゆけ同猫薬師 往昔産見長者の飼猫カイなりと。今式村草コノムラに

安ず。猫のことを祈て験ありと。奇なり。

盆はまた里の童と打連て

むかしおぼえの猫躍ワドリせむ同 産見長者屋敷ウツミ 今湖水ハ是長者か千町田なりし由里俗

屋根石沙中にうづたかく庭松とて在しも今ハ枯たる址もなし。

亦是小山と加路との半途沙漠の窪たる所を長者屋敷ともいえるよし。

庭松の枯し址さへ白砂に

うもれても名は高き屋ね石

是和銅年間の長者^ニ而代々此辺数処^ニ邸アリ。

同

伏野邑

洗濯島 沖に在。

打寄る波に洗ふて礫草の

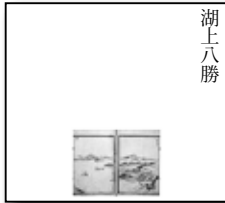
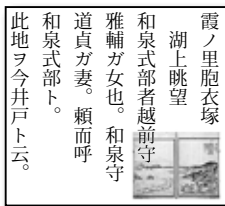
のりつけてほすせむだくのしま

同

内海邑

白兔大明神

往古是郡を竹ノ郡と称して篁あまたなりし由。口碑^{イヒナラハシ}に上



世白兔竹林^流に隸^{ツイ}て海中に漂ふ。漸く隱岐^{ヤウヤ}に止る。白兔鰐等^{ワニ}と我

党の多少を争論して終に鰐を連せて其数をかずえるに

託^{コトヨセ}して謀^{ハカリ}て上陸す。鰐憤怒^{イカリ}して噛^{カミ}つく。皮を裂^{ハガ}れて命を

全くす。後神教を得て津波奈といふ草をつけて愈る。今俗痘瘡の神と祈るも此故歟。

同 鐘ヶ崎

是往古溝口本願寺へ遺し鐘の上る所なりと。

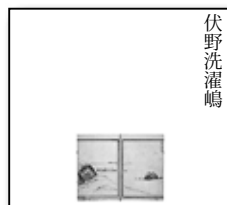
此鐘今尚寺町本願寺の什物と。^{本願寺ハ小山に在し旧寺。}

此さきに寄せて鯨^{ホエ}の吠^{ホエ}るこそ

昔の鐘のゆかりなるらむ

同 糕塚^{スクモ}

是産見の長がすくもを積^址しなりと。海辺にうづ高く小松生たり。



高草郡拾遺ナリ。

【下二七表】

高草郡

同 布施天神山城 拾遺 山名伊豆守時氏 光明院帝御宇 当国

守護ト而在城。後十四代ニテ天正年間為メニ豊公ノ没落。此城

今ハ田圃中なれ共其頃ハ堀深ク要害の地なり。先年田を

深く穿しに此堀跡に騎馬の貌歩卒の斃れたる形見へ

し由。今田中の路を天満繩手と云も昔の遺名なり。

同 山王祠 是山名氏鎮主の神なり。山上広平ニテ毎年四月

十五日祭式賑し。近年ハ殊に群参。

【下二七裏】

同 邑孝子多十良娘すゑ 安政六 御蔵米 頂戴。

米を数多下さるこそは溪水の

酒より深き御恵なり

同 横枕薬王菩薩 医王山朝日寺

往古 池なりしにや土中より掘出す。安産を守り給ふ。会

式には群参す。

横枕して待ほどに村雲の

はらめる月も生れ出けり

同 三熊埜権現 此山中総て材木形ノ石を積だるなり。是上

代諸神此儀 より隠岐石橋をかけわたるべき巧なり

とぞ。社ハ老樹茂たる半腹蕭然たる社頭なり。奇妙の岩也。

岩はしや神の巧を年経ても

忘れず渉す春霞かな

同 長谷 建石 長谷寺の途右の方牆下にあり。是往古ヨリ

犬塚なるよし。大石なり。十五六尺もあらんか。

今もこの塚のあたりは犬藪のほえかゝりぬる露を見る哉

同 長谷寺観音 毎年正月会式。参詣多し。

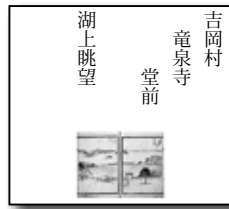
浅間しや我身忘れて福引の

慾とふたりではせまいるなり

同 菖蒲村 座光寺 是京師因幡薬師の址なり。

此山独孤にして南の山釣の山なり。是中納言行平の故

事なり。亦峯に古松あり。橘行平植たまふ。いさり松と云々。



是地往古海辺なりし由。故に古海の称あり。風景秀逸なり。

植し其君もしたはゞいざり松

いつまで峯に留主居がほなる

同多地見峠 松樹蔭々として物すごし。往古ハ阿頼女郎

とて老狐旅人を迷せし由。今も気疎かりける山路なり。

化されておとむ女良と木の根をば

まくらなとこで遊ぶおかしさ

同大塚 吉岡将監の一族の古墳。五輪山下田の辺に在。

古塚の昔をとへば秋風に

たゝかひ負てふせる穂すゝき

同吉岡箕上山 天正年間吉岡将監城址

氏神前より右に往て登こと凡廿町余。この幽谷に鞭やぶとて

昔将監の鞭を突立名残を惜れし処が今篁となれる由。

この頃大蛇栖するよし。矢倉天守の址平にして此処より高

草一円風景無双なり。近辺の高峯天外に秀たり。

千世までと鞭は繁れど打つけに

捨にし君のことおしぞおもふ

同岩本 葛籬尾砦 是も将監の仮城の墟なり。箕上

より此処に遷り三年にして秀吉公の為に落城。今僅に其

石垣の形残れり。内室の墳墓あり。

つゝら尾やなどかひなくもいにしへの

君を覆ふて隠さゞりける

同吉岡温泉 屋敷谷と云ふ長者あり。其娘なる者重病に依

同郡菖蒲座光寺薬師仏を祈る。夢想に頼りて柳の

下の薬師仏を掘出す。其所より温泉涌出たり。于今

其株より湯涌出る。是何れの世なる哉。当邑氏神ハ

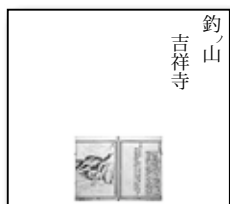
新宮大明神とて箕上山の下に祭る。又昔牛を索て

通りしに此湯壺の処て痛たる足を入て不動。終に全快すると。

同釣ノ山吉祥寺 禅宗 是橘蔵人行平釣シ玉ウ跡なり。

菖蒲座光寺の東隣。小山なり。此辺総て入海なりし故に

今も古海の称あり。此寺大夫和田氏より扶持する由。



同
松上大明神

往古の宮地ハ後峯なり。今高松上と云。今の地に下山ハ天保年間よりハ千五百余年。鐘ハ大化元と建武元となり。近県の大社なり。卯月朔日祭礼。山中社家民屋ともに土壁を禁止す。神のたゝりある由。山ハ巍々として松柏鬱茂たり。

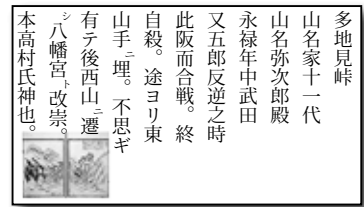
朝日さす松が上なる神垣に

田鶴と見えしハ白幣ニキテなり

同
砂見布引の瀑布

干魃カンバツにも水勢カレコトの湫コトなく常に細布を流る如く水碧岩ヘキガンを走る。奇岩キガン雲外ヒイに秀で緑樹森々として絶景無双なり。我も此滝のはたにやおりて見む

音もすゞしき白糸のわざ



【拾遺卷】

○穴居址。当国所々に在り。(中略)

高草郡妙徳寺村山麓箕上山裾も方七八
畳敷の竅あり。又所々に小竅ハ数々あり。皆上代人居住せし処
なり。頼て山跡の称あると。古書に見へたり。皆平石の蓋を覆
ふたり。(後略)

【拾遺六二表】

【拾遺六五表】

○高草郡玉津城址。是天正の頃武田又三郎在城後
兄高信モ于時八上郡曳田郷散岐水尾城主某武田高
信を招く。大義寺に宴を設ける時に高信往て筵に着
き暫して廁にゆく。壁外より鍵を入て高信を害す。是
咸山名家の股肱の臣なりしも終に毛利家の臣吉川式
部少輔が謀計にて反て甥をして伯父高信を滅亡
せしむ。高信か従者門外にて之を覺り撞入ども衛士支
へて不入しかば従者無念ながら立歸る途玉津猪ノ子
アル此処にて皆自殺して死す。其処に数墓于今残れり。

高信ハ山名家にて豪傑なりし由。位牌ハ大義寺に有。



同 高草郡玉津城墟鴨尾ト云
武田又三郎在城

又家老某河原村端の絶巖途に出張し敵兵を防
戦ふ。幼主を勧めて城を遁去らしむ。幼主従者
僅にて玉津城を落去同郡松上の神職氏
竊に客居す。夫より後都に上り織田信長に倚
頼する由○又玉津と猪子との間田圃中に陶器数品
埋みあり。人之を掘取れば瘡を病むと云伝ふ。先年猪
子の某暴虐なる者彼物を掘取て歸る。半途にて大
熱を発し戦慄する甚し、抛て大に恐懼し罪を悔
び之を返して素の如く埋覆す。従是衆恐れて敢て
掘ものなし。是武田一族滅亡の時の物なり。

【拾遺八四表】

○高草郡秋里大橋ハ邑美高草往來の途なりし。是布施城へ
通路豊公來伐の時迄ハ在之由。(以下略)

【拾遺八五表】

○雁津ハ高草郡徳吉の前を云。昔ハ此村名鶴田と云しに頼て斯
云ならハしたるが今ハ新田となりて其さま変革たり。

【拾遺八六表】

○高草郡長谷邑市良右衛門家の所持ニテ同山畑ニ松根を掘
しが大平石を穿出す。是よき石なり。取て橋にせんと引起すに
怪しや下に古穴あり。蓋石の裏又中にも朱ついで赫々たり。驚
て衆に語る。よりにて皆々往て窺ふに古墳なり。底ニハ朱二三部も在。
皆云是武將の墓ならんと。即時に素の如くし埋ミ高く垣築
上に秀倉を建置祭りし故障なしと。